

2018年度 育成センター 伝達講習会資料

2019/3/10

JBAユース育成部会

1. 都道府県育成センターの目的、指導内容目標を知る。
2. ドイツ・ライプチヒ大学育成専門アンテ・ホフマン博士によるタレント発掘、育成の講習より、都道府県育成センターに活かす知見を得る。
3. トースティン・ロイブルコーチとホフマン氏の協働によるジャンプトレーニングアジリティトレーニングの実践を確認し、都道府県育成センターに活かす知見を得る。

1. 育成センターの目的

■目的

- ・ 個の育成 「選手作り」
- ・ 成長スピードを速める
- ・ 勝利至上の戦術指導ではなく、**習熟度別、段階別を考慮した指導**を行う
- ・ 指導者は**育成世代の指導内容への理解**を深める
- ・ **育成世代コーチング**を実践する
- ・ **タレントスカウティング**の力を向上させる

■タレントスカウティング(選手発掘)

- ・ 今回のU13・U18ブロックDCでの方法論伝達＝都道府県育成センターで活用
 - フィジカルテスト（スプリント・ジャンプカ等バスケットボール特性）
 - バスケットボールスキルテスト（シューティング、パッシング、ドリブル、フットワーク等）
 - バスケットボールIQ（戦術を指導し、表現力・理解力を見る）
 - メンタル特性（リーダーシップ、積極性、闘争心、ディフェンスへの意識等）

1. 発掘

2. 育成

3. 指導者教育

4. 大会整備

5. リーグ戦準備

ユース育成組織：
都道府県育成センター

アンダーカテゴリー部会：
都道府県リーグ戦準備
都道府県協会主催大会準備

2. 育成センターでの指導内容

■ 習熟度別指導内容を基本として実施して頂きたい

- 習熟度を考慮しながら、ゲームモデルの段階を意識し、易→難の順序を意識しながら練習計画を立てて頂きたい。
- モデルプランとして5回分の練習内容をU12/U14/U16で提示している。
- 学ばせる目標が合致していれば、ドリルは各コーチの工夫によって変更して頂いて構わない。
- 量や強度は選手の力量に合わせて現場で調整して頂きたい。
- 目標はU16までに学ぶべきプレーを選手が知っておく、身につけておくことである。具体的にはファンダメンタルから始まり、オフボールスクリーン、オンボールスクリーンのチームプレーの基本的な考え方まで実施されていることを目標としたい。
- 育成センターでは特殊戦術、特定のプレイヤーのための戦術は取り扱わないこと。

■ 習熟度別指導内容資料について

● 2018年3月に育成センター指導者講習会にて指導内容コンセプト説明

＞ JBAホームページ/選手育成/ユース育成関連資料/13. 育成センター伝達講習会資料

● JBAホームページに育成センター指導内容モデルプランを提示。

＞ JBAホームページ/選手育成/ユース育成関連資料/3.都道府県育成センター指導内容 U12/U14/U16毎に5回分の指導内容を掲載している。

● USAカリキュラム内容、ラーニングエイジ資料を掲載している。

＞ JBAホームページ/選手育成/ユース育成関連資料/4.ガイドライン

● バスケットボールライブラリ（公認コーチライセンス保持者のみ閲覧可能）に映像資料が多く掲載されている。

＞ JBAホームページ/Basketball Library（右側バナー部分）

■ 重点：技術委員会で取りまとめた日本バスケットボールの課題

1. シューティング
2. リバウンド
3. コンタクト・フィニッシュスキル

■ 習熟度別指導内容・育成センター指導内容

ゲームモデル	ドライブアタック	5アウト、4アウト
易→難	パス&カット	5アウト、4アウト
	オンボールスクリーン戦術	
	オフボールスクリーン戦術	

3. 育成センターでのコーチング

将来を見据えた指導

指導者教育が全てにおいて重要

■育成コーチングの目的/考え方

- ・選手を作る
- ・選手を育てる
- ・可能性を信じてプレータイムを与える

■マンツーマン推進

- ・将来成長する土台を作るためにマンツーマンを学ばせる
- ・勝利至上主義に指導者が引きづられない

■リーグ戦

- ・普及的観点で試合環境を整える：補欠文化改善（複数チーム登録）
- ・拮抗したゲーム環境
- ・長期リーグ戦で日常にゲームがあること（練習～試合～練習）

■育成センター

- ・個の育成を目指す
- ・成長スピードを高める
- ・勝利を得るための戦術指導ではなく学ぶべき指導内容を習得させる
- ・指導者も習熟度別内容を学ぶ
- ・タレントスカウティングの考え方を実践：選手を見抜く力を養う

バスケットボールファミリーのみなさまへ

—JBAの理念—

**「バスケットボールで
日本を元気にします」**

—JBAのスローガン—

**「“Break the Border”
～超えて未来へ～」**

—新たなJBAからのメッセージ—

**「クリーンバスケット、
クリーン・ザ・ゲーム」
～暴力暴言根絶～**

JBAは、
インテグリティ（誠実さ、真摯さ、高潔さ）の精神に則り、
プレーヤーズセンタードを実践するため、
暴力、暴力的行為、暴言を根絶します。

4. タレントスカウティング

課題

① よい人材をどのようにして発掘するかの視点

■ 早熟と晩熟の理解

早期専門化の弊害：将来成功しにくい、障害・バーンアウトの危険性
バスケットボールは晩熟型スポーツ

■ タレント発掘の視点

運動能力

経験年数と技術レベル

最終予測身長（両親身長や環境要因による、データ収集による予測）

運動学習能力（コーディネーション能力）

メンタル特性（リーダーシップ、闘争心、積極性、ディフェンスへの意識）

② 現状のデータより

■ 2018年度U13/U14ナショナル育成センターより

- ・身長データよりPHVAを算出したところ、男女共に約1年の早期成熟が見られた。
=ナショナル育成センターに推薦されてくる選手は成長が早く、そのために選ばれている可能性がある。

→選手のパフォーマンスが早熟によるものか、高い運動能力を持っているものかを見極める必要がある

■問題点

1. 早熟系の発掘が多く行われている傾向

ナショナル育成センターに発掘されている選手のPHVA（年間最大身長発育量）を調査したところ、男子11.9歳、女子10.4歳であった。日本人の平均PHVAは男子で13歳、女子では11歳であり、男女共に平均して1年弱の早期成熟の傾向が見られた。
この結果からは、ナショナル育成センターに推薦され選出されている選手は、成長が早いために選出されている可能性があることを示唆している。

2. 晩熟でまだパフォーマンスが低い選手は落とされている

PHVAが来ていないため身長が大きくない選手で、運動能力がある選手は、小さいため多くいる選手の中で埋没しやすいこと。
技術の高い選手も同様に、小さいため多くいる選手の中で埋没しやすいこと。

早熟と晩熟、最終予測身長を見極めることが重要

■ 選手選考を行う際にどのような視点を持つべきか？を考える機会

- ・これまで「身長の高い選手」を優先して発掘をお願いしてきた。
- ・「その世代で大きい選手を発掘すべきか？」
- ・特に男子代表において「サイズアップ」は重要課題である。
- ・代表に選出される年代（およそ20歳以降）において「高身長」であることが重要。
- ・選抜が始まっていく育成世代（12歳～16歳）において早熟の選手はその後身長の伸びが止まり、トップ世代での選出にそぐわないケースがこれまで見られた。
- ・強化的には「将来を予測しながら選手選考を行う」必要がある。
- ・身長が高いことは必要要素であるが、その他の要素は？
 - 身長＝「将来の最終身長」：体型、両親の身長、身長予測データ
 - 運動能力＝瞬発系：スプリント、ジャンプ力、チェストパス
 - 技術＝ボールハンドリング、シュート、状況判断力・・・
 - バスケットIQ＝戦術理解が必要（習っていない選手もいることに注意）
 - メンタル＝積極性、闘争心、向上心、リーダーシップ・・・

■ 実際の選手選考を行う際にどうするか？

1. 身長が高いことは大切な要素

- 努力しても変えられない要素であるため
- 将来最終身長が大きくなりそうな選手を見つける。
- その世代で身長高い選手は注目すべきであり把握することは重要。

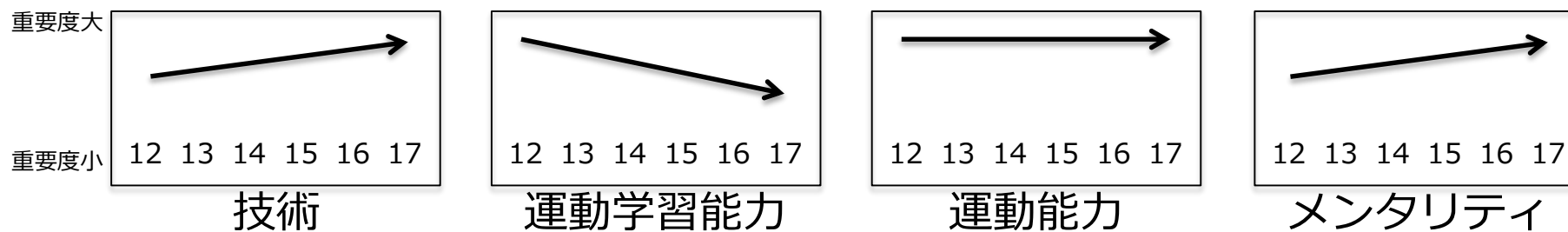
2. 小さい選手は必要ないか？

- PGは小さくても突出した能力があればやっていけるポジションである。しかし突出した能力が必要であることを十分考慮する必要がある。
- SG以降はできる限りサイズのある選手で代表は構成することが求められている。

3. 技術・運動能力・運動学習能力・メンタリティ

- 運動能力は重要要素：トレーニングでは獲得しにくい瞬発系，神経系。スプリント（加速）、ジャンプ力、アジリティ、クイックネス。
- 運動能力があれば技術が不足しても選考すべき（ただし若い時期、年を経るに従い技術レベルが必要となる）。
- 技術はトレーニングにより向上させることができやすい（運動学習能力との関係大）。
- 運動学習能力（コーディネーション）の高い選手は経験年数が短くても今後成長する可能性を多く持つ。若い世代で特に重要視する。若い世代で特に獲得すべき能力。
- メンタリティは重要な要素だが成長に伴い変化する可能性も考慮する。若い世代で重要視し過ぎない方がよい。

■年代により選考における重要度は変化する：完成年代への残り年数から考えて



■ 平均ではなく特別なものを持っていないか？（シュート、スピード、運動能力・・・）

■ その選手の短所がどの程度の問題か、解決可能か？

→ 技術は解決可能か？

→ 運動学習能力は解決可能か？

→ 運動能力は解決可能か？

→ メンタリティは解決可能か？

★ 選考するべきと考えられる例（最終予測身長が高いと仮定し）

- ・ シュートが下手だが運動能力がある・・・練習によりシュートは上手になる要素
- ・ シュートが特別に上手いが、ディフェンスができない・・・成長に従いディフェンスができるようになる可能性有り

最終予測身長、運動能力、技術（運動学習能力、経験年数との関係有り）、メンタリティを成長段階を鑑みながら考える。

※ PGは特別な才能でサイズを凌駕できる場合がある。

■ タレント発掘

- ・ 将来と今は同じではない。「将来を見据えた発掘」
- ・ 遅い発達を考慮する。「晩熟の可能性、早熟を見極める」

■ タレント育成

- ・ 個々のパフォーマンスを見ていくこと
- ・ 年齢ではなく発達段階を見極め、発達度を見る
- ・ トレーニング量や質を記録していき、最適なトレーニングプログラムを作っていく
- ・ 早期特化ではなく、様々なことに取り組みさせて幅広い能力開発を行っていく

■ その他の視点

- ・ 年代別の競技システムの検討（大会や選抜システムの在り方）
- ・ 競技者のメンタル開発（積極性や自信、自己肯定感の向上、挑戦心など）